



— 巻 頭 言 —

「不況は足元にまで忍んできています、それでも…」

兵庫医科大学病院 立 花 敬 三

日本核医学技術学会の財務を担当しています立花です。最近の社会情勢を反映して当学会の財務も厳しい状況に至っています。ここ数年、協賛会社、広告掲載会社からのご辞退も少なからず発生してまいりました。

世間では消費者の約9割が「物価が高騰している」と実感していることが明らかになっています。またその高騰でもっとも切実なものの事例としてはガソリン・灯油やパン・めん類などの小麦製品が挙げられ、生活に欠かせない商品の値上げが消費者の財布を痛めています。この原稿は10月に書いていますが、近くのガソリンスタンドのレギュラーガソリンの価格は166円、ハイオクは176円となっています。私は電車通勤をしていますのでさほどこの影響から免れておりますが、車通勤をされている諸兄には頭の痛いこととお察しいたします。しかし、たまの休みの家族でのドライブは極力、近場で済ませるように努力しています。こんな形でエコ対策に協力しています。いや協力を余儀なくされています。

不況がじわじわとわれわれ庶民のふところを寂しくしています折、“大阪の食の顔”、“大阪の誇るべき文化”のひとつが幕を閉じました。耳新しいことではありますが、大阪名物「くいだおれ」が2008年7月8日に閉店しました。関西以外の会員にはあまりなじみがないかもしれませんが大阪人にとっては大変残念な出来事でした。「くいだおれ」大阪の道頓堀に1949年6月に創業者、山田六郎が開店しました。昔から“京の着倒れ”、“大阪の食い倒れ”、“江戸の飲み倒れ”という言葉があります。京都の人間は着物道楽が過ぎて、大阪の人間は美食が過ぎて、江戸の人間は良い酒を飲み過ぎて財産を失うという江戸時代からの地域性を表した慣用句です。また、「くいだおれ太郎」はこの店の看板であると共に、ピリケンや通天閣と並び大阪を象徴するオブジェとなっていました。しかし、建物の老朽化や周辺環境の変化などを理由にとうとう時代の流れに勝てず59年の歴史に終止符を打ちました。奇しくも1949年6月は私が生まれた年月ですので誰よりも感慨深いものがあります。

一方、世界的にはサブプライムローン危機の深刻化が進んでいます。日本のバブル崩壊よりも始末が悪い話です。現在の世界で起きている原油高も食料品高騰もこうしたギャンブル金融権力がグローバルに暴れまくった結果です。この破綻の影響は、米国一国にとどまらず、世界中の金融機関と投資家に深刻な損害を与え現在でも被害が拡大しています。

わが日本核医学技術学会におきましても、冒頭で述べましたように後援して下さる企業の財務状態また一般会員の懐具合は厳しいものと推察いたします。しかしながら、それでもここ数年会員数が右肩上がりになっていますのは財務を預る立場であるものには光明です。このような折、会員ひとり一人の声を学会長はもちろん、執行部は真摯に聞き、今まで以上に会員参加型の運営をしていかなければならないと切に考えます。

会員の皆様方におかれましては、各地方会への参加はもちろんのこと、本部主催の核医学技術セミナー、総会学術大会に積極的に参加くださいます。どんな些細なことでも結構ですから学会役員にご意見やお叱りの言葉を云っていただきたく思います。

水先案内人の代表である福喜多学会長は会員の利益を考え、会員中心の運営を目指しています。皆様方のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。